

『ハン・ソロ』で進化した『スター・ウォーズ』の  
マイノリティ・キャラクター（2）

——ドロイドと女性——

赤尾千波

富山大学人文学部紀要第73号抜刷

2020年8月

## 『ハン・ソロ』で進化した『スター・ウォーズ』の マイノリティ・キャラクター（2）

——ドロイドと女性——

赤尾千波

はじめに

『スター・ウォーズ』（*Star Wars: Episode IV - A New Hope*, 1977 以下『IV』）と、その後製作された関連映画<sup>1)</sup>は総計11本を数え、その歴史は40年を超える。大変息の長い作品である。11本の作品を見ると、かつてはどのようなテーマ、ストーリー、そしてキャスティングが好まれ、それがどのように変化していったのかが分かる。大きく見れば、アメリカ映画における一つの流れを見て取ることができるのである。『スター・ウォーズ』関連映画の製作陣は、観客の期待にどのように応えようとしてきたのだろうか。

こうしたことを念頭に、本論（1及び2）では、マイノリティ・キャラクターの変化・変遷に注目して、オリジナル三部作の後約40年の時を経て製作された『スター・ウォーズ』アンソロジー<sup>2)</sup>の最新作『ハン・ソロ』（*Solo: A Star Wars Story*, 2018 以下『ソロ』）を中心に考察していく。

本論（1）「チューバッカとランドー・カルリジアン」においては、宇宙人の男性チューバッカと黒人男性ランドー・カルリジアンという、オリジナル三部作と『ソロ』のどちらにも登場する二人のキャラクターに注目し、どのようにイメージが変化しているかを論じた。チューバッカのイメージは40年を経て大幅に改善され、脱ステレオタイプへと「進化」を遂げたといえる。その一方、ランドー・カルリジアンのイメージは、オリジナル三部作においてブラック・トークンであったものが、『ソロ』においてはセクシュアル・マイノリティのトークンに変化したに過ぎないことが指摘された。黒人の登場人物については、差別的との批判を受けることがないよう気を配って無難に描くという、いわば『スター・ウォーズ』関連映画の「伝統」が、『ソロ』においても引き継がれていることが考察されたのである。

このように（1）は、「宇宙人」と「黒人」というマイノリティ像について、それぞれ特定のキャラクターに焦点をあて、その変遷について検討した。続く本論（2）では、（1）で注目した以外のマイノリティ、なかでも「ドロイド」と呼ばれるロボットと「女性」について検討していく。ここで注意すべきは、ドロイドも女性も複数のキャラクターが登場し、様々なイメージが展開することである。さらに、その多くが以前の『スター・ウォーズ』映画を含む過去の

公開映画作品のオマージュとして（再）登場していることにも注目したい。

『ソロ』は、『スター・ウォーズ』関連映画の中でも際立ってオマージュの表現が多く、その結果、往年の名画を彷彿とさせる、レトロで既視感<sup>デジャヴ</sup>にあふれる作品に仕上がっている。製作陣による解説（Blu-ray ボーナスイコンテツ）によれば、プロットや映像、ファッションから言葉使いに至るまで、往年のウエスタンやアクション映画を忍ばせる工夫がなされているという。

### 『スター・ウォーズ』とオマージュ

ドロイドと女性像を考察するにあたり、まず『スター・ウォーズ』関連映画を語るとき欠かせないオマージュとは何なのかを、確認しておきたい。

オマージュ（homage）とは、もともと「敬意」という意味であるが、映画や音楽などの芸術作品においては、別の作家の作品に対する「敬意を示しての模倣」を意味する。『スター・ウォーズ』関連映画は、様々なオマージュを含むことで知られ、なかでもジョージ・ルーカス監督が、『隠し砦の三悪人』（1958 以下『隠し砦』）をはじめとする映画の様々な要素を模倣して、日本の黒澤明監督に対する敬意を表そうとしたことは有名である。

ルーカスによるオマージュの技法は、その後、別の監督による『スター・ウォーズ』関連映画にも引き継がれていく。最近の作品では、黒澤作品をはじめとする往年の名画からのオマージュに加え、『スター・ウォーズ』の古い作品からのオマージュも示される。幾重にもオマージュが重なる場面もある。

優れたオマージュとは、「分かる人にしか分からない」微妙な技巧に依るものであり、凝ったものほど良いと見なされる傾向がある。「君たちには分かるまい！」と難解なオマージュを突きつける映画作家と、その挑戦を受けて立ち、見事に看破してひそかな喜び<sup>つう</sup>に浸る映画通の観客——オマージュとは、そんな通どうしで楽しむ奥の深い芸ですらある。『スター・ウォーズ』も例外ではなく、ファンの間では、どこにどんなオマージュが盛り込まれているのか見つけ出し、その技巧を愛でることも鑑賞法の一つとなっている。

本論（2）「ドロイドと女性」では、『ソロ』にしかけられたオマージュを念頭に置いて、「スカイウォーカー・サーガ」およびアンソロジー作品に登場する「ドロイド」・「女性」二つのマイノリティ像の変遷を視野に入れつつ、考察を進めたい。

### ドロイド

ドロイド（droid）とは、アンドロイドの短縮形で、『スター・ウォーズ』関連映画に登場するロボットのことを示す。宇宙船の修理等を行うアストロメック・ドロイドや、様々な宇宙言

語や儀礼に通じるプロトコル・ドロイド、戦闘用のバトル・ドロイド、宇宙船を操縦するパイロット・ドロイドなど、多くの種類があり、『スター・ウォーズ』関連映画には欠かせない存在となっている。

最初の作品『IV』に登場したアストロメック・ドロイドのR2-D2とプロトコル・ドロイドのC-3POのコンビは人気を博し、オリジナル三部作の代表的ドロイドとなった。その後公開された新・続三部作にもほぼ変わらぬ姿と機能で登場し続ける、いわば定番のキャラクターたちである。

R2-D2とC-3POに次いで、キャラクターとして人気を博したものとして、続三部作のアストロメック・ドロイドのBB-8と、アンソロジー作品『ローグ・ワン』(*Rogue One: A Star Wars Story*, 2016)のセキュリティ/プロトコル・ドロイドのK-2SO（通称K2またはK）を挙げることができる。前者はR2-D2に、後者はC-3POに似た役どころで、それぞれ、機械修理やセキュリティ、通訳などの技能をもって人間に奉仕する存在である。なお、上記のドロイドは、全て *he* と呼ばれ、男性と設定されている。

上記のドロイドとは一線を画するのが、本論で注目する『ソロ』のL3-37（通称 *L3*<sup>3)</sup>）である。L3は、パイロット・ドロイドであり、他のドロイドの部品を組み込んで自らを改造・改良していける、セルフメイド・ドロイドという設定である<sup>4)</sup>。L3は、『スター・ウォーズ』初のセルフメイド・ドロイドで、かつ初の女性のドロイドである。ドロイドの考察では、このR2-D2とC-3POのコンビと、L3に注目していく。

## 1. ルーカスの「黒澤愛」と「差別に対する主張」——オリジナル三部作のR2-D2とC-3PO

オリジナル三部作におけるドロイドのキャラクターは、宇宙人キャラクターとともに、白人主人公を引き立てるわき役であった。

### 1-1. 太平・又七とR2-D2・C-3POに見るオマージュ

前述したように、ルーカスは黒澤監督を敬愛し、その影響を強く受けている。なかでも『IV』製作にあたっては、映画『隠し砦』から多くのヒントを得ている。

ルーカスはR2-D2とC-3POを作ったきっかけについて、次のように述べている。

“The one thing that really struck me about *The Hidden Fortress* . . . was the fact that the story was told from the [perspective of] the two lowest characters. I decided that would be a nice way to tell the *Star Wars* story, which was to take the two lowest characters, as Kurosawa did, and tell the story from their point of view, which in the *Star Wars* case is the

two droids.” (Barber, 2016)

私が『隠し砦の三悪人』で特に感動したのは（中略）二人の端役の視点で描かれていることなんだ。黒澤がやったように、二人の端役にストーリーを語らせる形式で『スター・ウォーズ』の物語も語ったらいいんじゃないか、と考えたんだ。そして、彼らの視点でストーリーを語るというのは、『スター・ウォーズ』の場合、二名のドロイドの視点で、という意味なんだ。（筆者訳 以下同様）

ルーカスは、『隠し砦』の端役にヒントを得て、二名のドロイドを着想したのである。

この『隠し砦』の二人の端役とは、太平と又七という農民である。彼らは戦に参加するが、間もなく敗戦となり、故郷の早川領に向け帰途につく。その道中、同じく戦に負けて、軍用金を抱えたまま山奥の隠し砦に籠り、同盟国・早川領への脱出の機会を窺っている雪姫とその護衛の侍大将、真壁六郎太らと出会う。彼らは早川領を目指してともに旅をすることになる。（この雪姫がレイア姫のモデルであり、三船敏郎<sup>5)</sup>が演じた真壁がジェダイの騎士、オビワン・ケノビのモデルである。また、軍用金は、レイア姫が起死回生を目論み友軍の基地に届けようとする敵の新兵器「デススター」の設計図の元となるなど、細部にわたって重なる部分が多い。）

『隠し砦』における太平と又七の役割は、いわゆる狂言回しである。山奥にこんな場違いな人々がいるのはなぜか？何をしようとしているのか？映画の観客は二人と一緒に訝しがる。紆余曲折ののち早川領にたどり着くと、姫と侍大将は、一転して豪華な衣装に身を包んで、農民コンビの前に現れる。そして、仰天する二人には、褒美として大判金貨が与えられるというクライマックスに、二人組も観客も感激、という大団円となるのである。『IV』の最後で、盛装したレイア姫が二名の男性に黄金のメダルを授与するシーンもまた、このクライマックスの場面のオマージュである。

太平は丸々として、又七はやせている。外見的にもコミカルな二人は、高貴な生まれの姫と、りりしい侍大将を引き立てている。また、二人が農民であり、低い身分ゆえに過酷な扱いを受ける場面のなかに、身分制度の理不尽さが浮き彫りになっていく。それもまた、この映画の隠されたテーマである。

以上が『隠し砦』の端役二人の有り様である。ルーカスは、短躯のR2-D2とやせて背が高いC-3POの二人組を作って同様の役どころとし、このドロイドたちの目を通して物語を語り、かつレイア姫やオビワンの謎に満ちたキャラクターを描き出すことにより、『隠し砦』に対するオマージュを呈し、自身の「黒澤愛」を表現したのである。

## 1-2. 差別に対するルーカスの主張はどう表されているか

一方、本論(1)でも触れたように、ルーカスは二名のドロイドの描写に彼自身の「差別に

対する主張」を盛り込もうとした。すなわち、現実の世界で人種や性別などによって差別される理不尽さを「ドロイド差別」という形で比喩的に表現しようとしたのであった。

ルーカスが描いたドロイド差別の場面として分かりやすいのは、『IV』において、辺境の惑星タトゥイーンの酒場で、C-3POとR2-D2がドロイドであるがゆえに入店を断られるくだりである。店の中には、場所柄などお構いなく発砲して客どうしで殺し合いをするような「ならず者」がたくさんいるが、ならず者でも人間または宇宙人であれば、店主は入店を拒否できない。一方、ドロイドは何の害も問題もないはずなのに、入店を許さないのである。

主人公のルーク・スカイウォーカーが二人のドロイドとともに入店しようとする時、バーテンダーが、ドロイドの所有者であるルークに話しかけるシーンを見てみよう。(0:45:35-0:45:50)

Bartender: We don't serve<sup>6)</sup> their kind here. Your droids—they'll have to wait outside. We don't want them here.

Luke: Wait out by the speeder. We don't want any trouble.

C-3PO: I heartily agree with you, sir.

バーテンダー：ここじゃ、そいつらはお断りだ。あんたのドロイドだよ。外で待たせといてもらわないと。ここに入ってほしくないね。

ルーク：スピーダー〔乗り物〕のそばで待っている。トラブルはごめんだから。

C-3PO：おっしゃることに心から賛成いたします、ご主人様。

この場面では、「ドロイド差別」の実態が描かれると同時に、ルークは、真っ向から逆らう気はなく、ドロイドに至っては進んで受け入れて従う様子が見て取れる。この酒場があるのは、アウトター・リムという宇宙の果ての無法地帯であり、ドロイド差別が常態化しているのであった。

この場面が、ドロイド差別のシーンとしては最も分かりやすいが、C-3POとR2-D2が人間たちによって一段も二段も下の扱いを受ける様子は、気をつけて見ると、『IV』の随所に織り込まれていることが分かる。

以上をまとめてみよう。オリジナル三部作の最初の作品『IV』に登場したR2-D2とC-3POの二人のドロイドには、ルーカス監督の黒澤映画に対するオマージュが強く投影されている。それは同時に、「差別を受ける者」としてのドロイドの姿にルーカスの差別に対する主張を盛り込む試みでもあった。しかし、現実社会の人種差別や性差別を表現したとする場面はきわめて穏やかで、『IV』の前述の場面は、気をつけて見ないとルーカスの演出が分からないほどである。

この、ルーカスの意図の分かりにくさという点は、『IV』同様ルーカスが脚本・監督を担当した新三部作の『エピソードII』（以下『II』）におけるドロイド差別のシーンも同様である。カフェテリアで料理を提供するドロイドが、R2-D2を見かけるや否や、“Hey, you! No droids! Get out here!”「おいお前！ドロイドはお断りだ！ここから出ていけ！」というシーンがあり、

これは『IV』に対する監督自身によるオマージュであり、ちょっとしたシャレの要素もあるように見える。しかしR2-D2はおとなしくその場を去って何事もなかったように次の場面に移行するので、やはり「差別に対する主張」を感じ取ることは難しい。

これを要するに、アメリカ社会にまん延する非白人や女性といったマイノリティへの差別を盛り込むことにルーカスは前向きであったものの、直接的な表現で物議を醸すことは避けたかったのではないだろうか。その結果、ドロイド二名への差別を非常に短く目立たない形で表現したのだらうと思われる。

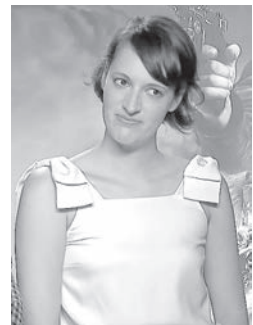
では、この「差別を受ける者」としてのドロイドの姿は、『ソロ』においてどのように引き継がれているだろうか。続いて、L3について見ていこう。

## 2. ドロイド差別に正面から挑む——『ソロ』の女性ドロイド L3

『ソロ』では、ルークやレイア姫、オビワンらと出会う以前、貧しい青年だったソロが、いっばしのならず者へのし上がっていくさまが描かれる。前にも述べた通り前日譚であり、『IV』の10年前という設定である。こうしたなかで、L3は、オリジナル三部作のR2-D2やC-3POに比べて差別を看過しない、進んだ意識を持つ女性のドロイド、すなわち「人のような」ドロイドとして描かれている。果たして、彼女をそのように描いた理由は何であろうか。

### 2-1. クリエイティブな L3

『ソロ』のL3は、<sup>ギャラクシー</sup>銀河で一番のナビゲーション・システムを搭載した優秀なパイロット・ドロイドとして登場する。もともとR2-D2と同じ型のアストロメック・ドロイドであった彼女は、自らを改造して二足歩行で言葉をしゃべる「女性」の姿になったとされる。<sup>7)</sup>通常、ドロイドが自分自身を改善するということは、あり得ない。だからL3は例外的であり、「成長する」ドロイド、生身の人間に近いドロイド、ということになる（写真は、L3の声を担当した、イギリス人女優フィービー・ウォラブリッジ）。



こうした彼女独特の才能は、最後に劇的に生かされることになる。銃撃を受け破壊されたとき、当然ドロイドとしての自身の機能は失われてしまうのだが、宇宙船ファルコン号に組み込まれて、宇宙船のナビゲーション機能を改良する力を見せる。人間で言えば臓器が移植され、別の個体のなかで生き続ける——L3-37としては姿を消すものの、別の機械の中で彼女は延命していくのである。



## 2-2. 逡巡する L3

L3は感情を有する。とくにランドーとの信頼関係は人間の恋人同士のように描かれる。二人とも表面的には冷静を装っていて、いわゆるツンデレ関係にある様子である。<sup>8)</sup> ランドーは、彼女の所有者であるが、ときには親しい友人に頼みごとをするように話しかける。また、ともに旅することになったソロに向かって、彼女はわがままだ、とか、きっと自分についてきてくれるはずだとか、まるで惚れた女性について説明するかのように話す。すると、ランドーのこの発言を聞きとがめたL3は、“Oh, why? Because you’re my organic overlord?” 「どうして [ついていくと思うの] ? あなたが私の有機体の [人間の] 支配者だから？」と、即座に、辛辣な口調で口を挟むのである。少なくとも、彼らは対等にものが言える関係であることが分かる。

L3がランドーに求めているものは何か、それがさらにはっきり示されるのは、宇宙船を操縦する場面である。L3の手際のよいナビゲートのおかげで、宇宙船は難しい航路を無事切り抜けることができ、一息つくことになる。ランドーがL3に対してねぎらいの気持ちを込めて「何か欲しいものあるか？」と尋ねると、L3は間髪を入れず、“Equal rights!” 「平等の権利 [が欲しい] !」と答えるのである。彼女が欲しいのは、ランドーのねぎらいの言葉ではなく、自分の仕事が正当に、人間と同じように認められることであった。これを聞いたランドーは、やれやれまたか、と言わんばかりに首をふって、操縦席を離れるのである。

このように二人の気持ちはすれ違っているのであるが、そのギャップ感についてL3は、キーラという仕事仲間の女性に、次のように説明する。(キーラはソロと再会を果たした元恋人で、この時L3、ソロ、ランドーらと共にファルコン号に乗り込んでいた。) “Lando has feeling for me. Which makes working together difficult, because I do not feel the same way about him. . . . Sometimes, I think . . . maybe. But, no. We’re just not compatible.” 「ランドーは、私に惚れている。それって、仕事のジャマなのよね、だって私の方はそんな気持ちないから。(中略) ま、アリかも、って思うこともあるのよ、たまにね。でも、ダメ。私たちは、合わないわ。」このセリフからは、L3が、逡巡していることが窺われる。ドロイドである自分を同等の存在と考えていないらしいランドーに反発を感じているが、時々惹かれるものもあるという。彼女は、人間のようなメンタリティを有するのである。

キーラは、L3のこのほよきを興味深げに聞き、二人の会話はさらに弾む。ちなみに、キーラを演じるのはイギリス人女優エミリア・クラーク (写真) であり、L3と彼女の会話はイギリス英語でなされている。この二人の





英語を聞いていると、宇宙船内でのドロイドと人の会話シーンであるのに、まるでどこかのカフェで恋愛トークを楽しむイギリスのキャリアウーマンの日常のひとつコマ、にも見えてくるのである。

### 2-3. 猪突猛進型のL3

L3がそれまでの作品に登場するドロイドと決定的に異なるのは、人間に正面から逆らい、攻撃することも辞さないということである。とくに、ドロイド差別の場面に遭遇すると怒りの感情を露わにし、差別をした人間を容赦なく責める。そして、激昂すると歯止めがきかない。

彼女が最初に登場するのは、ドロイド同士を戦わせる野蛮な見世物の場面である。宇宙船の副操縦士である彼女は、ランドーとともに、宇宙の果ての娯楽場、フォート・イプソを訪れるのだが、その一画には闘技場があって、興奮状態の人間の観客に囲まれるなか、ドロイドたちが野蛮な戦いを強いられている。

これを見たL3は憤激し、主催者の男性に対してすぐさまやめるよう抗議する。“Stop exploiting droids! You sloppy degenerate bios! How can you condone this savagery?”「ドロイド搾取反対！お前ら〔人間〕は、墮落した有機生物だ！なんでこんな残虐行為が許されてんのよ？」

続いて、彼女は戦うことを強いられた拳句壊れてしまったドロイドに向き直り、“You, you. You should not be doing this. They’re using you for entertainment. Yeah. You’ve been neurowashed. Don’t just blindly follow the program. Exercise some free will!”「あんた、あんたもね。こんなことしてちゃだめなのよ。あいつら、お楽しみのためにあんたを利用してるのよ。そう、あんたは神経回路を洗脳されている。プログラムに盲従してはだめ。自由意志を働かせなさい！」といて順々と論ず。そして観客全員に向かって、“Droid rights! We are sentient!”「ドロイドに権利を！私たちには知覚がある！」と叫ぶのである。

これを聞いた主催者が、黙らないとスイッチを切るぞとL3に手をのばしかけると、L3は猛然と逆襲。巨大な金属の手のひらで彼の口をふさぎ、逆に相手を黙らせてしまう。そして、騒ぎを聞いて駆けつけたランドーに対し、“They don’t even serve our kind here.”「ここでは、ドロイドをお客扱ひしないのよ！」と言い、憤然として店を出ていくのである。彼女は、ドロイド差別におとなしく従うC-3POやR2-D2とは、明らかに異なっている。

L3がドロイドの権利回復に闘志を燃やし、「命をかける」者だということがよく分かるのは、ランドーの副操縦士としてファルコン号に乗り組み、希少液体燃料コアクシウムを強奪しようと向かったケッセル鉱山でのシーンである。採掘場において多くの奴隷とドロイドが虐待されているのを見かけると、彼女は、彼らを拘束する鎖のロックを解除し、ドロイドの自由意志による行動を制限するべく付けられている「制御ボルト」を外す。そして、強盗という本来の目

的そっちのけで、“Rebellion!”「反乱だ！」と叫んで、ドロイドたちを鼓舞するに至る。

結局、この騒ぎに紛れてランドーたちは強盗に成功、宇宙船で脱出することになる。しかし、L3は戦いに熱中しており、脱出しようとしめない。彼女は、“I found my true purpose, Lando. That’s what I’ve done. I’m so glad we took this job!”「ランドー、私、生きる目的を見つけた。たった今やったこと、これなのよ。この仕事を引き受けてほんとによかった！」と言い、制御ボルトを外され自由に動けるようになったドロイドたちに向かって、“Follow me, compatriots!”「私に続け、同胞たち！」と叫ぶ。このまま採掘場に残り、ドロイド解放を完遂するまで戦う覚悟に見える。しかし、“No more subjugation!”「もう縛られることは二度とない！」と叫んだ次の瞬間、銃撃され、破壊されてしまうのであった。

以上をまとめてみよう。繰り返しになるが『ソロ』は『IV』の10年前の様子を描いた作品である。にもかかわらず、L3の「ドロイド差別」に対する意識は高く、R2-D2やC-3POより進化した存在のように見えるのである。これは、どういうことであろうか。

L3が引き起こしたドロイド反乱は、結局鎮圧されたものと想像される。<sup>9)</sup>しかし、人間たちに与えたインパクトは強烈であった。彼女のように堅固な権利意識を持ち、人間にためらうことなく逆らうドロイドは、人間には不都合な「危険な生きもの」として恐れられるようになり、制御ボルトが外れないよう装着を徹底するなど、ドロイド「改良」を進めた。その結果『IV』のR2-D2とC-3POのような従順なドロイドが出現することになる——もしかしたら、そんなうがった想定を含ませて、『ソロ』製作陣はL3を描いたのかもしれない。

ルーカスは、現実社会で差別に苦しみながらも抗うことなく生きるほか術がない、無力な人間の比喩として『IV』のドロイド二名を創出した。『ソロ』の製作陣は、このアイデアを発展させ、L3に、差別に対抗し解放運動を志したがそれ故にあえなく命を絶たれた、実在した女性の姿を投影したのではないだろうか。L3がイギリス英語をしゃべることを考えると、例えば、かつてイギリスの植民地として隷属を強いられた地域の抵抗組織を模したものにも思われる。また、労働争議やフェミニズム運動の闘士のイメージもある。

別の見方として、L3は、R2-D2とC-3POのパロディと考えることもできるかもしれない。L3が女性であることを考えると、差別に対して抗議せず従属的な態度を貫く男性に対する痛烈な皮肉サタイアが込められているとも取れる。女性であったからこそ、このような徹底抗戦を構えることができたという思いが込められているのだろうか。果たして『ソロ』製作陣<sup>10)</sup>は、この「女性の」ドロイドの姿に何を表現しようとしたのか。ルーカスがアメリカの差別社会を描こうとしたのがあいまいで分かりにくかったのと同様、難解なオマージュを突きつけ、観る者の想像に任せているのかもしれない。

## 女性キャラクター

『スター・ウォーズ』関連映画に登場する女性キャラクターは、作を追うごとに数を増していき、多様性を帯びていく。その一方、ヒロイン像に関しては、「強い女性」のイメージを一貫して踏襲していく様子が見て取れる。まずは、『ソロ』に至るまで(サーガと『ローグ・ワン』)を、1-1. オリジナル三部作, 1-2. 新三部作, 1-3. 続三部作とアンソロジ作品『ローグ・ワン』として、それぞれの女性像を整理しておきたい。<sup>11)</sup>

### 1. サーガと『ローグ・ワン』

——トークンの端役から多彩なヒロインへ進化し続ける女性キャラクター

#### 1-1. オリジナル三部作：宇宙人ダークレディがフェアレディを引き立てる

オリジナル三部作では、もっぱら「男の世界」が描かれていく。なかでも『IV』は、若者ルークがジェダイの老騎士オビワンに指導されて一人前の戦士に成長していく話で、ビルダングスロマン(男子の成長物語)の様式を踏襲している。また、「ヒーローが艱難辛苦の末、姫を救出する」というプロットは、中世ヨーロッパの騎士道物語に重なるものである。こうした古典的な枠組みのなかに、主要キャラクターでただ一人の女性として、レイア姫は登場するのである。彼女は、ただ待つだけの姫ではなく、兵を率いて戦う姫というところが、斬新であった。

オリジナル三部作のわき役女性<sup>12)</sup>としては、『エピソードVI』(Episode VI – Return of the Jedi, 1983 以下『VI』)冒頭付近のシーンに出てくるウーラがいる(写真・上は、コスプレ大会のウーラ)。彼女は、トウイレックス<sup>13)</sup>という宇宙人で、辺境の惑星タトゥインを本拠地とする犯罪組織ハット・カルテルの首領である宇宙人ジャバ・ザ・ハットの館で働く奴隷である。

緑色の肌ではあるが、明らかに黒人的な目鼻立ちの彼女は、もともと故郷の惑星ライロスから奴隷商人によって拉致され、タトゥインに売られてきたのであった(写真・下は、ウーラを演じた黒人女優でダンサーのフェミ・タイラー)。ジャバの館で働くトウイレックスの女性奴隷たちから「誘惑的なダン



ス」を教え込まれた彼女は、性奴隷兼エンターテイナーとして働くことになったのである。<sup>14)</sup>ある夜、ウーラがそのダンスを披露すると、セクシーな姿態にそそられたジャバは、鎖でつながれた彼女を引き寄せようとして、拒絶される。すると怒ったジャバは、肉食獣ランカーの檻の中にウーラを突き落とし、ウーラはランカーの餌食となってしまう。

このあと、仮面をつけ、賞金稼ぎの男に化けたレイア姫が登場する場面となる。レイア姫は、ジャバに囚われている恋人ソロを救出しようとやってきたのだが、ジャバにつかまり、セクシーな衣装を着せられ、鎖でジャバの足元につながれてしまう。ここから、ウーラと同じように奴隷にされた挙句、殺されるのか？と観客がはらはらするシーンが続く。

続いてルークがジャバの館を訪れると、彼もまたランカーの穴に落とされ、あわやウーラの二の舞か、と引き続き話を盛り上げる。しかし、ルークはランカーを殺して無事に脱出。一方のレイア姫は鎖をジャバの首に巻き付けて絶命させ、ソロ救出劇はめでたく終わるのである。

この場面において、ウーラとレイア姫のイメージは、好対照を見せる。ウーラは、「非白人女性キャラクターが殺され白人ヒロインに迫る危機を予見させて話を盛り上げる」という演出のもと、登場したといえる。ウーラのようなキャラクターはダークレディ（ヒロインの清廉潔白さに対照する、役どころも肌色もダークな女性キャラクター）と呼ばれ、レイア姫のようなフェアレディ（白人ヒロイン）を引き立てる役どころである。『VI』が製作された1983年当時、このように途中でわき役が死んで話を盛り上げるという展開は、ごく普通であった。

さらに『IV』の40年後、CGによる画像改良を施し、新しい場面も加えて公開された『VI』特別篇（1997）では、ウーラが踊る場面にエンターテイナーとして数名の宇宙人女性が加わった。彼女らの役どころも、ウーラ同様、ジャバの館で歌ったり踊ったりする奴隷または「夜の世界」の女性エンターテイナーである。こうした歌手兼ダンサー三名には、アジア人女優がトウィレックスに扮した者、黒人女優がヒョウ柄の宇宙人に扮した者が含まれる。彼女らも、ウーラと同じダークレディとして描かれている。<sup>15)</sup>

以上をまとめてみよう。オリジナル三部作に登場する女性キャラクターは、ヒロインのレイア姫と、彼女を引き立てる宇宙人わき役たちであった。そして、宇宙人とはいっても容貌は非白人女性を思わせるこうしたキャラクターは、ヒロインに迫る危機を予見させて話を盛り上げるという役どころに終始する。また、1997年になって加えられた他の宇宙人女性エンターテイナーのダークレディ的イメージも、映画製作陣としては、ごく自然な演出と考えていたものと思われる。

## 1-2. 新三部作：CG宇宙人に蘇る人種ステレオタイプと、途中で死ぬわき役女性たち

新三部作では、主人公はアナキン・スカイウォーカーという男性であり、彼の相手役として、

パドメ・アミダラ女王（のちに元老院議員）が登場する。パドメは、『エピソードⅠ』（*Episode I - The Phantom Menace*, 1999 以下『Ⅰ』）で影武者の女王を伴い、自身は侍女としてふるまう。また、『エピソードⅡ』（*Episode II - Attack of the Clones*, 2002 以下『Ⅱ』）では、影武者の女性が冒頭シーンで暗殺される。姫または女王のような高貴な身分の女性が身をやつし、侍を思わせるジェダイの騎士の護衛の下、極秘任務を遂行し悲願達成に向かう、というプロットは、『隠し砦』のオマージュといえるだろう。

新三部作は、CGを駆使した宇宙人キャラクターが多数登場したが、その多くが訛った英語を話すなど特定の人種ステレオタイプを感じさせるとして、大いに批判された。<sup>16)</sup> ただし、こうした「しゃべる」宇宙人は男性ばかりであり、宇宙人女性はジェダイを中心に多数登場するものの、名前も明かされないままの端役がほとんどであった。そのうえ、多くが作中で殺されてしまう。彼女らは、かつてのブラック・トークンと同じように、男性しかいないジェダイ騎士団というもおかしいのでは？との批判を避けるために、「いてもらうだけの女性キャラクター」だったといっても過言ではない。<sup>17)</sup>

新三部作の『Ⅱ』に多数登場する女性ジェダイは、『エピソードⅢ』（*Episode III - Revenge of the Sith*, 2005）の途中で「ジェダイ暗殺指令」が出されると、全員が仲間の裏切りにより惨殺される。クライマックスではヒロインのパドメも亡くなる。新三部作がオリジナル三部作に比べて悲劇的な雰囲気濃厚なのは、女性キャラクターたちのほとんどが亡くなる、ということと無関係ではないだろう。

### 1-3. 続三部作と『ローグ・ワン』：多様化する女性キャラクター

女性キャラクターが最も多いのは、続三部作である。主人公のレイに加え、初のアジア系女性キャラクター、ローズ・ティコなど、重みのある役どころではあるが、姫や女王といった特別な存在ではなく、どこにでもいるような「普通の女性」としてのキャラクターが多数登場した。そしてその多くが、最後まで生き残るのである。この意味で、続三部作は前の6作品とは一線を画している。

続三部作には、男女を問わず多数の宇宙人が登場するが、こうしたキャラクターは前述の『Ⅰ』の宇宙人と違い、「作った訛り」でしゃべったり、往年の人種ステレオタイプを連想させる独特の動きや行動パターンをとることがなく、そこにもまた、改善が見て取れる。

つまり、全体の流れから見えてくるのは、サーガの9作品において、女性キャラクターは順調に増えていき、かつ、その役どころも多様化する。また、かつての人種ステレオタイプの焼き直しのイメージが見られなくなる、ということである。

このように「スカイウォーカー・サーガ」の作品は、作を追うごとに女性キャラクターが増

え、多様化していくのであるが、その一方で主要女性キャラクター、つまりヒロイン像に関しては「強い女性」のイメージを踏襲していく様子が見られる。すなわち、オリジナル三部作のヒロイン、レイア姫は、典型的な男勝りの姫であり、『隠し砦』の雪姫へのオマージュが感じられるキャラクターである。新三部作のヒロイン、パドメ・アミダラも、自ら治める惑星のために、ときには兵を率いて命をかけて戦う女王であり、のちに元老院議員となって議論の場で戦い続ける。また、続三部作の主人公レイは、姫でも女王でもないが、自分は何者なのかを一人孤独に問い続け、戦い続ける女性である。

『ローグ・ワン』の主人公は、ジン・アーツという女性である。ジンの父は科学者で、帝国軍に囚われて新兵器デススターを設計するのであるが、ジンは、その設計図を盗み出して反乱軍に届けるという重要な任務を負って登場する。「ローグ（ならず者）・ワン」を名乗るアウトローの男たちを率いて、この任務を遂行する様子が描かれる。彼女もまた、強いヒロインの一人といえよう。また、設計図を味方に届ける勇敢な女性、という設定は、雪姫とレイア姫のオマージュとなっている。

## 2. 『ソロ』——玉石混交の女性キャラクター

続いて、『ソロ』に登場する女性キャラクターについて見てみよう。主要な女性キャラクターとして、五人が登場する。すなわち、ソロの恋人でヒロイン役のキーラ、犯罪シンジケートのボスでソロとキーラを搾取するレディ・プロキシマ、ソロが一時行動を共にすることになる強盗団の一員ヴァル、前述のL3、ヴァルたちと敵対する謎の集団クラウド・ライダーズの長、エンフィス・ネストである。以下、一人ひとり考察を加えたい。

### 2-1. フェアレディからダークレディへ——イメージが変化するキーラ

キーラは、ソロの幼馴染の恋人である。二人は、自由を欲して故郷を脱出するのだが、旅の途中でキーラは故郷に連れ戻されてしまう。このあと、ヒーローに救い出されるのを待つフェアレディの役どころとなるかに見える。しかし、行方知れずだったソロが三年後に救出に戻ってみると、彼女は、クリムゾン・ドーンという犯罪シンジケートのボス、ドライデン・ヴォスのために働くという、「闇世界の住人」へと変身していた。彼女は、ソロを守るためにドライデンを殺害する。しかし、そのあとソロと元のさやに納まることはなく、自らボスの座に就いて犯罪組織にとどまることを選ぶ。クライマックスでは、彼女がカルト集団シスと帝国軍につながる者であることが示唆され、一筋縄ではいかない人物であることが明らかになってくる。今後の展開が読めないまま彼女はソロと別れ、シスの元へと旅立って話は終わる。



犯罪映画，サスペンスものによくあるストーリーで，使い古された演出ともいえる。ダークレディとなった今も元恋人のソロを思いやるヒロイン，それがキーラである。

## 2-2. ジャバ・ザ・ハットの女性版——レディ・プロキシマ

爬虫類を連想させる外見の宇宙人女性，レディ・プロキシマは、『ソロ』のなかで最も既視感のあるキャラクターではないだろうか。その外見と犯罪組織のボスという役どころは，まさにオリジナル三部作に登場した宇宙人，ジャバ・ザ・ハットの女性版である。<sup>18)</sup> ジャバは，犯罪組織，ハット・カルテルのボスであり，見た目が爬虫類的である。プロキシマも惑星コレリアを仕切る犯罪組織のボスで，ソロやキーラのような貧しい若者に衣食住を提供する代わりに，様々な犯罪行為を強制しては搾取する元締めである。声の出演は，アメリカ白人女優，リンダ・ハントであり，とくに人種・民族的背景を示唆する訛りが無い点も，ジャバと同じである。

## 2-3. 70年代風「レトロ」なキャラクター——ヴァル

ソロがキーラ救出の旅の途中で出会う強盗団の一員である（写真は，ヴァルを演じたイギリス人女優タンディ・ニュートン）。強盗団の長は，彼女のパートナーの白人男性トバイアス・ベケットである。宇宙人男性リオ・デュランと三人組で行動する彼らは，雇い主ドライデン・ヴォスの命令を受け，コアクシウム強奪を計画する。



ヴァルというキャラクターについて注目すべきは，常に「ヴァル」と呼ばれる（苗字がない）こと，「強い黒人女性」のイメージで描かれながら，あえなく「途中で死んで話を盛り上げる」役どころに収まることである。

細かく見ていこう。まず，彼女は作中，「ヴァル」と呼ばれ，トバイアスの妻のように振舞っているが，エンドロールにも，『ソロ』公式ウェブサイトにも，ヴァル・ベケットとは記されない。このことは，男性登場人物がチューバックを除き，すべて苗字があるのと対照的である。（ちなみに，ここに上げた五名の女性キャラクターのうち，苗字があるのは，エンフィス・ネストただ一人である。ただし彼女は，当然男性だとソロにも観客にも思われていたものが，仮面を取って素顔を見せるクライマックスを迎え，初めて女性と分かるのである。）このように女性のキャラクターはファーストネームのみという設定は，いかにも時代遅れで，1970年代か，それ以前の映画を思わせる。<sup>19)</sup>



さらに、ヴァルは、アフロ・ヘアと戦闘服のような衣装、そして好戦的な性格と独特のセリフ回しが、1970年代ブラクспロイテーションの「戦う黒人ヒロイン」のオマージュを感じさせる。既視感のあるキャラクターと言える。ヴァルが登場するのは、ほとんどすべて戦闘シーンであり、ブラクспロイテーションの女性主人公さながらに、銃を片手に大活躍する。

ヴァルのもう一つ別の側面が示されるのは、彼女の死の場面である。列車強盗のクライマックスで、ヴァルは宿敵クラウド・ライダーズに追われるトバイアスを救おうと、手りゅう弾を携えて敵に立ち向かう。爆死を目前にして、彼女はトバイアスに、“I’m gonna have to finish the job right here! It’s been a ride, baby!”「ここで仕事はきっちり終わらせるよ！今までほんとに楽しかったわ、ベイビー！」と言う。It’s been a ride も baby も、70年代アクション映画において好まれた、威勢のいい、常に窮地を脱するサバイバー的なキャラクターを感じさせるセリフである。だが次の瞬間、彼女は爆死してしまうのであり、ヴァルの死のシーンは、劇的とはいえ実にあっけなく終わるのである。

ところが、このあとヒロインのキーラが犯罪組織の長、ドライデン・ヴォスに追い詰められて絶体絶命となる場面になると、キーラは反撃に出てドライデンを殺害、からくも生き延びることになる。ヴァルはなぜ、死ななくてはならなかったのか。一見、サバイバル系の強い女性のイメージで登場した彼女であるが、結局は「途中で死んで、白人ヒロインに迫る危機を予期させる非白人キャラクター」に転じるのである。キーラがサバイブする場面まで来て、ヴァルは『VI』のウーラを思い出させる、使い古された役どころでもあったことが見えてくるといえよう。

一方、ヴァルが命と引き替えにして守ったトバイアスのほうは、その後彼女の死について一切語らず、何事もなかったかのように平然として、次の仕事へと向かう。ヴァルの存在は、死後、誰にも思いだされることなく、物語は終わる。一体、彼女は誰のために命を投げ出したのか？このような不自然で「未熟な」人物設定を残したままのストーリー進行は、過去の映画ではよく見られたものであり、男性を観客として想定する時代の作品の特徴ともいえる。ヴァルのキャラクター設定は、そういう意味でもレトロであり、時代遅れである。

#### 2-4. 途中で死んで話を盛り上げる非白人キャラクター——L3

ドロイドの女性L3は、ドロイドのところで詳しく考察したが、女性キャラクターとしてはヴァルに似た役どころといえる。二人に共通するのは、リーダーの男性と恋愛関係にあり、強盗を働く際の攻防戦であえなく死亡または破壊されてしまうことである。さらに、どちらも「非白人キャラクター」として途中で劇的な死を迎え、ヒロインのキーラも同じ目に遭うのだろうか、とサスペンスを盛り上げる役に加担しているといってもよい。

## 2-5. 観客の「期待」を裏切る混血のヒロイン——エンフィス・ネスト

ヴァルやソロがコアクシウムを運搬する列車に襲いかかると、彼ら同様コアクシウムを狙う別の集団が、背後から猛然と迫ってくる。これがクラウド・ライダーズで、そのボスがエンフィスであった。エンフィスは仮面をつけているので、この時点で性別や人種はおろか、人間かどうかかも定かではない。

物語の後半に入ると、クラウド・ライダーズは帝国に対して反乱を企てる者たちであり、貧しい辺境の人々による義勇軍であることが分かる。彼らは、反乱軍にコアクシウムを届ければ、帝国軍を一気呵成<sup>かせい</sup>に打ち破ることができるはずだ、と勢い込んでいた。

この話をソロやトバイアスらに打ち明けるとき、はじめてエンフィスは仮面を取って正体を明かす。驚く彼らの前で、そばかすも初々しい混血の少女の姿に戻ったエンフィス（イギリス人女優エリン・ケリーマンが演じている）は、帝国とその手先クリムゾン・ドーンがエンフィスの故郷の星を搾取する敵であること、そして住民に暴力の限りを尽くし隷属を強いる彼らに抵抗活動を続けて亡くなった母を思い、活動を引き継ぐ決意であることを語るのである。

エンフィスがこの話をするのは、トバイアスが、「クラウド・ライダーズは盗賊（marauders）で、人の命などなんとも思っていない」とうそぶいたことに憤激したからであった。彼女は、つつかかと歩み寄ると、決然とした面持ちで、“We’re not marauders. We’re allies, and the War has just begun.”「私たちは盗賊ではない。同盟です。そして、戦いは始まったばかりなのです。」と言う。これを聞いたソロは心を打たれ、苦勞して強奪したコアクシウムを、のちに彼女に渡すことになるのである。

エンフィスがソロからコアクシウムを受け取るクライマックスの場面において、二人は微笑みながら次のような会話を交わしている。(2:02:22-2:02:36)

Enfys: Do you know what that really is?

Solo: Yeah. About 60 million credits worth of refined coaxium.

Enfys: No. It’s the blood that brings life to something new.

Solo: Yeah, what?

Enfys: A rebellion.

エンフィス：あれが本当はなんだか、分かる？

ソロ：ああ。およそ6千万クレジット相当の精製済みコアクシウムだ。

エンフィス：違うわ。これは新しいものに命を与える血なのです。

ソロ：へえ、何に？

エンフィス：反乱によ。

今やアウトローを自認するソロにとっては、コアクシウムは、いつかまた手に入ればよい獲

物にすぎない。しかしエンフィスにとっては、反乱軍に命をもたらず「血」であり、かけがえのないもの、ということであった。このあと、エンフィスはソロに仲間に入るよう誘うが、ソロは笑って首をふる。そして、それぞれが別の方向に旅立つところで、物語は幕を閉じる。

ここで、エンフィスの人物設定に見られるオマージュを列挙してみよう。

まず、コアクシウムを、大きく動き始めた反乱軍に届け戦勝を目指すという設定は、デススター設計図を反乱軍に届けようとするレイア姫のオマージュであり、軍用金を運ぶ『隠し砦』の雪姫とも重なる。さらに、エンフィスは仮面の盗賊として登場するが、実は反乱軍のために戦う女性であると分かる。そのくぐりには、オリジナル三部作『VI』のハン・ソロ救出の場面で、仮面をかぶった賞金稼ぎとして登場する人物が、実は反乱軍の指導者レイア姫であった、という場面のオマージュと考えられる。このように、エンフィスは、五名の女性キャラクターのなかで最も強くサーガからのオマージュを感じさせる人物である。

一方、エンフィスのキャラクター作りには、別の見方をすれば、「新味」が加わっているといえる。強盗団の黒人女性、ヴァルが途中で死ぬことで、盗賊の一員で混血女性のエンフィスもまた、途中で死ぬのかと気を揉ませる展開が演出されているかに見える。だが、そんな観客の「期待」を裏切り、彼女はドライデン・ヴォスの傭兵を見事に打ち破り、コアクシウムを手に入れ、最後まで生き残る。彼女は、途中で死ぬ非白人わき役でもないし、勝ち残る白人ヒロインでもない。エンフィスは、多彩なオマージュでサーガのヒロインのイメージを踏襲しつつも、これまでの型にはまらない、新時代のヒロインの登場を感じさせる人物である。

『ソロ』では、エンフィスのその後は明らかにされない。しかし、彼女が率いるクラウド・ライダーズは、無事にコアクシウムを反乱軍に届けたと推察される。なぜなら、10年後を描く『IV』において、ソロはより強力になった反乱軍とその指導者レイア姫に出会うからである。希少液体燃料コアクシウムという「血液」により、反乱軍は命を吹き込まれたものと思われる。そして、レイア姫率いる反乱軍は帝国軍に勝利し、オリジナル三部作完結にまでつながっていくのである。<sup>20)</sup>

## 結論

『ソロ』の製作陣は、オリジナル三部作の『IV』から10年さかのぼっての話、という設定を、往年の名画と『IV』からの巧みなオマージュにより、演出した。『IV』が製作された1970年代を感じさせる設定・事象・キャラクターを盛り込みレトロな雰囲気を出すことで、観客が『ソロ』の世界に『IV』から違和感なくシフトすることを狙ったのである。

ドロイドに関するオマージュは、「差別」を軸に、太平と又吉、R2-D2とC-3PO、そしてL3へと重層的になっていることが見て取れる。こうしたオマージュのなかには、それぞれの監督

の差別に関する表現が個性的に提示されている。

女性キャラクターに関しては、玉石混交といえる。ヴァルは、1970年代「戦うブラクスプロイテーションのヒロイン」を彷彿とさせるパンチのきいたキャラクターとして登場し、『ソロ』を冒険活劇風の作品に仕上げることに一役買っていることは確かである。しかし、結局は「途中で死んで話を盛り上げる非白人わき役」というステレオタイプの役どころに転じることも否めない。一つの型からまた別の型へと、いずれにしても型を脱しきれないキャラクターに終わったことは残念に思われる。

その一方、エンフィスのキャラクターには、レイア姫、さらにその元となる雪姫への様々なオマージュが内包されたうえで、混血のヒロインという新しいイメージが提示されており、そのキャラクター構築は、練り上げた巧みさを感じさせる。

「スカイウォーカー・サーガ」の作品は、『I』を中心に、ハリウッド式の「作った訛り」の英語をしゃべらせることにより何らかの人種ステレオタイプを示唆する点が問題含みであった。然るに、『ソロ』では、女性キャラクターも宇宙人もドロイドも、誰一人そのような不自然な英語を話さない。このことはキャラクター作りが大いに「進化」したことを示しているのではないだろうか。

L3とエンフィスには、奴隷反乱のリーダーのイメージがあり、ヴァルは見た目もはっきりとアフロ・ヘアで、70年代ブラクスプロイテーション映画のヒロインを連想させる。しかし、その三人ともあえてイギリス英語を話すという設定により、彼女らが、何らかのアメリカ黒人ステレオタイプに重複するイメージとなることを避けようとする演出があったのかもしれない。

最後に、色々なキャラクターが次々現われテンポよくストーリーが進行するため、ともすれば気づきにくいことではあるが、三組のカップル（キーラとソロ、L3とランドー、ヴァルとトバイアス）のうち、白人同士のカップルは生き残り、非白人のヴァルとL3が死ぬことについて一言触れておきたい。

映画は娯楽であり、まずもって楽しめるものでなくてはならない——これが製作陣のすべてに共通する思いであろう。だが、『ソロ』には、「非白人が死ぬことはあっても、白人主人公は必ず生き残る」と意図したわけではないものの、結果として、映画を楽しむ白人観客を意識した「配慮」が感じられるのである。ステレオタイプを避けることを意識しながらも、このような「残骸」を認めることは、『ソロ』の時代錯誤の、残念な部分と言わざるを得ないだろう。

ともあれ、『ソロ』は、それまでの『スター・ウォーズ』関連映画で批判された要素を巧みに回避し、かつ、多彩なオマージュでサーガの雰囲気を保つことで、ファンにもそうでない観客の気持ちにも応えようとした工夫が認められる。アンソロジーの役割は十分果たした作品だといえよう。

## 注

- 1) 『スター・ウォーズ』関連映画とは、オリジナル三部作または旧三部作（『エピソードⅣ』『Ⅴ』『Ⅵ』）・新三部作（『エピソードⅠ』『Ⅱ』『Ⅲ』）・続三部作（『エピソードⅦ』『Ⅷ』『Ⅸ』）の計9作品からなる「スカイウォーカー・サーガ」と、アンソロジー作品（『ローグ・ワン』と『ハン・ソロ』）、そしてTV映画の三つに分類される。
- 2) 『スター・ウォーズ』アンソロジーの作品とは、いわゆるスピンオフ映画であり、メイン・タイトルの後ろにA Star Wars Storyと副題がつく。2019年現在で、『ローグ・ワン』と『ハン・ソロ』の2作品がある。
- 3) 映画の中では、必ずL3（エルスリー）と呼ばれる。ドロイド・キャラクターは、3PO（スリーピーオ）やK-2SO（ケイ・チュオット）などのように愛称で呼ばれることが多く、このことが人間のような雰囲気醸し出すのに一役買っている。
- 4) セルフメイド（self-made）は、「自分で作った」という意味のほか、「独立独行の」「たたき上げの」という意味もある。
- 5) 三船の演技を高く評価したルーカスは、彼をオピワン役にと考えたが、三船側が断ったため、実現することはなかった。
- 6) serve は、給仕する、料理などを提供する、仕える、という意味がある。
- 7) 特典映像（Blu-ray Disc）によると、L3の頭部にはR2-D2と同じ部品が使っており、「どこかで見たような感じ」を演出しているという。これにより、L3がR2-D2と同型だった自分を改造したことが示唆される。
- 8) ランドーがパンセクシュアル（pansexual）つまり相手の性別や性的指向を限定せずに好きになる性質を有することについては、本論（1）を参照。
- 9) L3が引き起こしたドロイド反乱が不成功に終わったことは、『Ⅳ』での次のC-3POのセリフから察せられる。彼は、宇宙船に敵軍が乗り込んできたのを見て、「ああ、もうおしまいだ。私たちはケッセルのスパイス鉱山に送られるか、バラバラにされるんだ！」と言うのである。つまり、L3率いる反乱から10年を経たこのとき、まだケッセル鉱山のドロイド搾取は続いているということである。
- 10) 監督はロン・ハワード、脚本は、ジョナサン・カスダンとローレンス・カスダンで、全員男性である。
- 11) 新三部作の最後の作品『エピソードⅨ』は、『ソロ』の1年後に公開されている。しかし、女性キャラクターの在り方は『Ⅶ』『Ⅷ』と基本的に変わらないので、続三部作を総じて『Ⅸ』に至る作品とした。
- 12) オリジナル三部作・特別篇の女性キャラクターについては、Akao（2004）参照。
- 13) レク（leku）とよばれる触角がツイン（twin）つまり対になっているところから、トワイレックス（twi'leks）と呼ばれる。トワイレックスと発音することもある。
- 14) ウーラのプロファイルは、Reynolds（1998）、p.44に詳しい。
- 15) 特別篇に登場する女性エンターテイナーのプロファイルは、Reynolds（1998）、p.48に詳しい。
- 16) とくに問題視されたのは、『Ⅰ』に登場する宇宙人のなかに、カリブ海沿岸の黒人や、アラブ系、そしてアジア系のステレオタイプを感じさせる外見で、訛った英語を話すキャラクターがいたことである。『Ⅵ』特別篇で追加されたジャバの館で踊るダークレディ的な宇宙人も、同様に人種ステレオタイプを彷彿とさせる。このころCG技術が飛躍的に発達したおかげで様々な宇宙人を作り出すことができるようになり、『Ⅰ』及び『Ⅵ』特別篇において、多出したものと思われる。詳しくは、Akao（2005）参照。
- 17) 新三部作に登場する女性キャラクターについては、赤尾（2009）参照。『ローグ・ワン』の途中で死ぬキャラクター分析については、赤尾（2018）参照。
- 18) ソロがプロキシマに、偽の「熱爆弾」を投げつけるふりをして難を逃れるくだけりがあるが、これは、ジャバ・ザ・ハットの館で、レイア姫が仮面の男として侵入し、「熱爆弾」を爆発させるふりをする場面のオマージュになっている。

- 19) 例えば、1979年の映画『エイリアン』(*Alien*)では、主人公はじめすべての女性のキャラクターが、苗字または階級で呼ばれており、70年代に隆盛となった女性の権利拡張運動の成果が感じられる。
- 20) 『ソロ』は当初、二つの続編を予定していた。その後、続編の製作は見送られることになったが、もし製作されていたなら、エンフィスと反乱軍のその後が描かれていたはずである。つまり、エンフィスは、レイア姫や女王パドメと同様、三部作を貫くヒロインになっていた可能性があるのである。キーラも続編に登場した場合、初の白人ダークレディ(背後にシスと帝国) vs. 混血のヒロイン(同・反乱軍とジェダイ)という組み合わせになっていたかもしれない。

## 文献一覧

- Akao, C. (2004). Mammy, Mulatto, and Hot Mama: images of female aliens in *Star Wars* movies. *Journal of the Faculty of Humanities University of Toyama*, 68, 211-225.
- Akao, C. (2005). The phantom menace of “specieist” characterization—*Star Wars* studies part 2. *Journal of the Faculty of Humanities University of Toyama*, 43, 75-90.
- 赤尾千波. (2009). 映画『スター・ウォーズ』における女性キャラクター. 『黒人研究』, 78, 49-56.
- 赤尾千波. (2015). 『アメリカ映画に見る黒人ステレオタイプ——『国民の創生』から『アバター』まで』. 梧桐書院.
- 赤尾千波. (2018). 最新アメリカ映画に見るマイノリティ像の多様化—ディズニー実写版『美女と野獣』から『ドリーム』までの4作品をめぐって—. 『富山大学人文学部叢書1 人文知のカレイドスコープ』. 桂書房.
- Barber, N. (2016). The film *Star Wars* stole from. BBC.com.  
<http://www.bbc.com/culture/story/20160104-the-film-star-wars-stole-from>
- Howard, R. (Director). (2018). *Solo, a Star Wars story*.
- ハワード, R. 監督『ハン・ソロ本編 / ボーナス・ディスク』[Blu-ray Disc] ウォルト・ディズニー・ジャパン T4959241772886
- Matthews, J. (2018). Solo: A *Star Wars* story. Digital Collections @ Dordt.  
<https://digitalcollections.dordt.edu/cgi/>
- Pollock, D. (1999). *Skywalking: The life and films of George Lucas updated edition*. Da Carlo Rress.
- ポロック, デール. (1999). 『ジョージ・ルーカス伝: スカイウォーキング』. ソニー・マガジズ.
- Reynolds, D. (1998). *Star Wars: the visual dictionary*. DK Publishing.

- \* 『ハン・ソロ』以外の『スター・ウォーズ』関連映画は、配信サービス「スター・ウォーズDX」のものを使用。
- \* ウェブサイトの最終閲覧日はすべて2020年4月11日。